

---

# IS ~ トネリコの木の下の吟遊詩人 ~

夢現

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS 　トネリコの木の下の吟遊詩人

### 【Nコード】

N8922Z

### 【作者名】

夢現

### 【あらすじ】

「これは作者が思いつきで書いたものです。過度な期待はしないでください。」「梨桜、何言ってるんだ？」「いえ、ちょっと電波が」

転生者じゃないけどチートなオリ主がなんかいろいろやる話。

## プロローグ

「どうでしょうかねえ…」

机に腰掛けながら考える。さっきから目の前にいる友人から非難がましい視線を送られているが おそらく机に座る行為に対してだろう。それも無視して思考に没頭する。

その原因は手に握られた書類。内容はIS学園への編入手続。嗚呼、読めば読むほど行きたくない。

「どうでしょうも何もありませんよ」

「行かないとだめですよ」

目の前の友人達からの温かいお言葉。友達思いで泣けてきますね、まったく。

「ですよねえ」

友人たちの言葉に反応しつつ嘆息する。

「なにがそんなに嫌なわけ？」

目の前の友人の一人である奏弥かなみ、にそんなことを聞かれる。なにが嫌？きまつてるでしょう。

「そんなの好きに研究ができないからに決まってるじゃないですか」

奏弥の問いかけに即答する。まったく、そんなの聞くまでもないだろうに。

「はあ。やっぱりか」

どうやら相手もそんなことはわかっていたようで、顔を手で覆うため息をつく。

「でも行かないわけにはいきませんよ。それと机に座るのは行儀が悪いです」

目の前にいる友人のもう一人、ひから陽に注意される。

「まあ、細かいことは気にしない気にしない」

カラカラと笑いながら受け流す。

「はあ。私たちも行ければいいんですけど…」

ここで現実逃避も兼ねてIS学園について少し説明しようと思う。IS学園と読んで字の通り、IS操縦者を育成するための教育機関だ。ISとはもとは宇宙開発用のマルチフォームスーツとして開発され、その性能から兵器となるも、各国の思惑からスポーツに落ち着いたという、所謂飛行パワードスーツだ。

そしてこのIS、重大な欠陥がある。それはISコアが女性にしか反応しないため男性には扱えないのだ。そのため必然IS学園は女子校なわけだが、

「私は男なんですけどねえ」

そう、私は男だ。友人達から女にしか見えないと言われようとも、まぎれもない男性だ。

ならばなぜIS学園へ転入に？と思うかもしれないがなんと動かしてしまっただ、ISを。

原因は不明。ほかの男性で試したがもちろん反応しなかった。

まだ公表されていないがそれも時間の問題だろう。はあ、憂鬱だ。

「まあ、あきらめなさい」

「私たちも編入させてもらえないか頼んでみますから」

ちなみに彼女たちはIS操縦者だ。それも企業代表。

「はあ、まあ仕方ないですかねえ」

ハア。自由に研究ができないのは痛いですが大人しく行くつもりでしょう。

何となくテレビをつけてみるとニュースで『男性IS搭乗者現る！?』という内容で特番がやっていた。

は？

「…陽、情報規制はした筈ですよね？」

思わず一瞬思考がフリーズしてしまいました。

「はい。ミーミル社の方で公表されないようにしてる筈なんですけど…」

陽の返事を聞いて安心する。ミーミル社というのは彼女たちが所属している企業だ。

「ってかこれ、梨桜のことじゃないっぽいんだけど」

「はい？」

奏弥の話聞いてもう一度テレビの方に視線を向ける。テレビに出ていた名前は『織斑一夏』。

は？織斑？

テレビに出た思わぬ名前に再び思考がフリーズする。

「アハハハハハハ！」

思考が戻ると同時に笑う。これが笑わずにいられるでしょうか。

いいですね、最高です。

「陽、奏弥。決めました。私はIS学園に行きます」

二人ともポカンとしています。

ああ、なんと面白いんでしょう。まだ、笑いが収まりません。

「陽。検査はミール社で済ませますね。あと、一応まだ情報規制はしておいてください」

いまだ、呆然としている陽に声をかけ、用件を伝える。

「え？あ、はい」

フフフッ。楽しくなりそうですね。

こうして私、萩原梨桜<sup>はいはづりお</sup>はIS学園に編入することになりました。

## 入学試験

こんにちは、萩原梨桜です。

私は今、IS学園にきています。それにしても大きいですねえ、  
うう。

「おい、何を呆けている」

おっと、注意されてしまいました。いや、こんなに大きな建物、  
他にもあったんだなあと、少し感動してしまいました。

視線を注意した人物に向ける。すらりとした長身、狼を思わせる  
鋭い吊り目の女性。

「すみません、千冬さん」

一応謝罪しておく。

「織斑先生だ。次はないぞ」

なるほど、確かに公私混同は良くないですね。覚えておきましょう。  
う。

「しかし、昔と変わらん。お前は」

「そうですね」

ふーむ。自分ではだいぶ変わったと思うんですけどね。

「まったくアイツといい、お前といい。面倒事ばかり引き起こしてくれるな」

おお。千冬さんが疲れたように言うなんて。レアですね。

「ああ、そういえば一夏君はどうしてます?」

「アイツだったら今頃どこかの研究所で検査だ」

まあ、そうでしょうね。ちなみに私はミール社で済ませました。ちよつといろいろあつてコネがあるんですよ。

「いやあ、吃驚しましたよ。まさか、織斑先生の弟さんがテレビに出てるとは思いませんでした」

いや、本当にびっくりしましたよ。思わず笑ってしまつぐらいね。

そんなことを話していると目的地についたようだ。ところで私、何をするのか聞いてないんですけど。

「さて、お前には入学試験を受けてもらう」

「入学試験ですか?」

「まあ、どの程度ISを動かせるか見るだけだ」

成程。

「これがお前のISスーツだ」

そう言ってISスーツを差し出す千冬さん。

「相手は学園の教師で、お前の機体はラファールだ。さっさと着替える」

有無を言わせぬ口調で説明する千冬さん。

「あ、はい。わかりました」

っというか、ここで嫌とは言えないでしょう。

ISスーツに着替え、学園の訓練機であるラファール・リヴァイブに乗る。

スキンバリアー  
皮膚装甲展開、……完了。

スラスト  
推進機正常動作、……確認。

ハイパーセンサー最適化、……完了。

展開されると同時に浮遊感。PICによって体が宙に浮く。ハイパーセンサーによって視界が鮮明になる。

『準備ができたらピットから出る』

千冬さんから通信が入る。

「了解」

カタパルトから射出されアリーナに出る。そこには既に学園の教

員が同じラファールに乗って待っていた。

『それでは試験を始める』

戦う。

そう考えると気分が高揚してくる。しかし逆に頭は冴えてくる。

カウントが始まる。

3 機体の武器を確認するチェック

2 アリーナの範囲を確認

1 最後に相手を確認

0

カウントが終わると同時に、スラスターを全開にして相手に詰め寄る。同時に手にはアサルトライフルを呼ぶコール。

突然の行動に相手が慌てているうちに距離を詰めながら発砲。

アサルトライフルから吐き出された弾丸が相手のシールドエネルギーを削る。

しかし相手も素人ではない。すぐさまこちらから距離を取りつつ武器を展開し、撃ち返してくる。

相手が撃ってきた弾丸を三次元躍動で回避。今度は相手から距離

を取りつつ、アサルトライフルを収納、スナイパーライフルを展開。

ロックサイトが視界に出る。相手の機体をそれに捉え、発砲。

アサルトライフルよりも速い初速で相手に迫る弾丸は、その狙い通り着弾。相手の装甲を吹き飛ばす。

突然の切り替えに一瞬混乱した学園教師だったがすぐさま対応。

こちらの射撃を三次元躍動で回避しつつ応射してくる。

こちらの装甲にいくらか被弾しシールドエネルギーが削れる。

「フフフっ」

思わず笑みがこぼれる。嗚呼、楽しいなあ。

しかし同時につまらないとも思う。こんな低性能ロースペックな機体ではなく専用機を使いたい。

そんな考えが一瞬浮かぶもすぐに棄てる。今は目の前の戦闘が先決だ。

スナイパーライフルを投棄。再び相手に詰め寄る。相手の攻撃は対物シールドを展開して防ぐ。

敵の姿が近づいたら、再びスラスターを全開にし、対物シールドを構え突進。

突進という予想外な攻撃に相手が怯んでいるうちに対物シールド

を投棄。近接ブレードを展開する。

そのまま相手を袈裟懸けに斬り付け、斬り上げ、突きを繰り出す。狙いは装甲が無い部位。

相手は絶対防御が発動しシールドエネルギーが急激に減少する。

最後にグレネードを展開。至近距離で発砲、着弾とともに爆発。

相手のシールドエネルギーを削りきり、戦闘終了。

『ピットに戻れ梨桜』

いろいろと問いたいことがありそうな千冬さんの声が通信で入る。その証拠に名前で呼んでますし。

「分かりました」

「でっ？どういうことだ？」

千冬さんが常よりもさらに低いトーンで訊いてくる。

「なんのことでしょうか？」

とりあえず慌けてみる。ていつか千冬さん。威圧感出し過ぎです。並の尋問より怖いです。

「貴様のあの操縦技量に決まっているだろうが」

「ああ、あれですか。シミュレーターですよ、シミュレーター」

「シミュレーター？」

何の事だか分からず眉をひそめる千冬さん。

「ああ、そうか。外だとまだ無いのか。ミール社が作ったんですよ。IS用のシミュレーター。それで少し訓練しましたから」

「またミール社か……。いったいあそこと外だと、どれだけの文明レベルの差があるんだ？」

「さあ？どのくらいでしょうね」

千冬さんからの問いかけを適当に流す。

「まあいい。今日はこれで終わりだ」

「そうですね。それじゃあ私は帰りますね」

そう言って帰ろうと踵を返すと千冬さんに呼び止められた。

「おい、梨桜」

「なんですか？織斑先生」

首だけで振り返って返事をする。

「……お前は何がしたいんだ？」

「何を、ですか？」

突然の質問。いったい何のことだろう？

「ああそつだ。あんなもの（・・・）を作りだしてお前は何かしたい」

「その台詞はあのウサギさんに言ってやったらどうですか？」

「茶化すな」

おっと、睨まれてしまいました。

「そうですねえ。飽くなき知識への探求、ですかね？」

「…そうか」

千冬さんは私の回答を聞いて難しそうな顔をする。まあ、別に嘘は言っていないんですけどね。

「それじゃ、僕は帰りますね」

そつ言っこの場から立ち去る。

「……やはり、お前は変わっていないよ。梨桜」

千冬さんの眩きを聞きながら。

おまけ

「ああ、そうだ。お前入学したら髪を結え。女子と間違える輩がいるからな」

「え？だったら切りますよ。いい加減鬱陶しいんですよ、この髪」

「だめだ」

「何故っ!？」

千冬も羨む、艶やかな髪を持つ梨桜であった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8922z/>

---

IS ~トネリコの木の下の吟遊詩人~

2011年12月28日01時57分発行